

---

# まほろば

大沢 綾子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まほろば

### 【Nコード】

N9923I

### 【作者名】

大沢 綾子

### 【あらすじ】

春雷シリーズ。

花屋でアルバイトをしている千秋と、古書店でアルバイト中の倉田人ではないこの二人の穏やかな生活に、影が差す。それは、過去の未解決殺人事件。殺されたのは、萩原千秋自身だが、不死者の千秋は死ぬことなく生きているのだ。その事件を追うのは、日本のXファイルと言えはわかりがいいかもしれない、警視庁の刑事二人だった。

あいかわらず、BL描写は皆無です。

駅前から広がる商店街の、入口付近に花屋がある。こぢんまりと  
してはいるが色鮮やかなグリーンが店先に並んで、ロτζジ風の構え  
も手伝つて通学帰りの女子学生でにぎわう。彼女たちのお目当ては、  
1つ300円のかわいらしいブーケだった。

この店の店長は見た目あまりぱっとしない中年男で人気はないが、  
その店にアルバイトの青年が入って急に客が増えている。その彼が  
提案して、試しに店頭に並べてみたそのブーケはちよつとした売れ  
行きになっていた。

今も、レジの奥にある作業机に向かつてその青年は、ちまちまと  
売れ残りや枯れるまで数日もない花々を小さなブーケに仕立ててい  
た。ちよつど昼の忙しい時間帯がすぎたところで、しばらくは客足  
も遠のく。青や赤、黄色やピンクの花を手早くX字のように合わせ  
て、カスミ草やシダでアクセントをつけながら仕上げていた。茎の  
部分をひとまとめに荷づくり紐で結えると、使いこまれた植木鉢で  
長さを揃える。

パチン、パチン、とリズムカルな音がした。

店長は、奥でお仕着せのエプロンをつけて作業している青年をち  
らりと見、すぐにアーケードの切れ目から見える空を見上げていた。  
その空は、いわし雲が風に流されて高く、もう秋の空だった。

店長は鉢をいくつか動かして、ダンガリーのシャツの袖を折りあ  
げるとまた、店の奥をすかし見た。

青年は、3つ目のブーケを作っていた。花の色に合わせた和紙で  
包んで、細いリボンをつけているところだ。鉢の縁でリボンを扱  
くと、くるくると巻きあがる。

半年以上前から、店長はアルバイトをしてくれる学生を探してい  
た。もともと、妻とふたりでやりくりしている小さな店だ。幾つか  
の店舗にグリーンを置く契約もしているが、商店街だけでも競争が

激しい。それでも何とか軌道にのってきたところだった。

が、頼りにしている妻が妊娠をして、こんな重労働はさせられないと思ったのだ。配達に行っている間の店番を、任せられるような人間も欲しかった。しかし、時給の安さはどうにもならない。わずか、780円　誰も見向きもしないまままで悩んでいたら、彼が来た。

店長は最初、店先に立った彼に「いらっしやいませ」とも言えな  
いまままで、突っ立っているだけだった。何と云うか、三十数年を生  
きてきてこういう生物には出会った事がない、という感じの美しさ  
だったからだ。

抜けるように白い肌と、黒目がちな愁いを含んだ眼差しは独特で、  
くちびるは紅い。整った顔は大人のおんなのものだが、そこに少女  
のようにあどけない感じが同居していた。しかし、性別は男　と  
ても生身の人間という気がしなかった。

僕を、雇ってもらえますか。

安いですよ、と言うとやっと向こうが笑顔になっていた。

構いません。

彼のなまえは、萩原千秋といった。

警視庁の一室で、パソコンに向かって仕事をしていた<sup>ヤシロイツキ</sup>八代樹は、  
デスクの前に立った部下にキーボードを打つ手を止めて顔を上げる。  
年齢は30代前半。その顔は男っぽく整ったもので、冷たさとやさ  
しさを同時に含有している。そして、独特の瞳を持っていた。涼し  
げな二重目蓋の中の瞳が、仕事で現場に入るとき妖しい燐光を放つ  
ことを知っている者はあまり多くない。

「なんだ……」

「いえ　なんだか、妙な話をして再捜査しろと言っている老人が  
いるんだそうですよ。そのご老人、元所轄のデカ長だったとかでね」  
報告している部下は、これで刑事なのか、と言われかねない容貌

だった。すらりとした長身に髪は長めにのばしてうすい茶色。スーツを着てはいるが、ホストと言われても仕方がないほど派手な容姿をしていた。華奢な手には、拳銃は似合わない。じっさい銃など一度も撃ったことがなかったが、しかしナイフは似合いそうな雰囲気だ。

その部下を上から下まで眺めて、八代は幽かに笑う。

「おまえ……また、どこかで喰ってきたんだろう」

「わかります？」

「血色が良すぎる」

嫌だなあ、とその部下は艶然と笑い返していた。

「仕事ですよ。それが、俺の仕事だってわかっているでしょう？」

八代は返事をしない。が、ここの部署に配属されている刑事たちが、のきなみ規格外だということは一番承知していた。実際、統括している八代自身が規格外だ。拳銃も撃てるし、柔道も有段者で普通に警察学校から交番勤務を経ていまの地位にいる。そんな普通のステップを踏んだ刑事は、八代ひとり。そこからして、この部署が普通でないことがわかる。

「それで、その事件はどんなものだ」

それがね と、その部下神谷は話し始めた。

昭和38年が明けてすぐの一月に、ひとりの若い男が所轄署に出頭してきた。無精髭をはやし、くたびれたコートは薄汚れて罪の意識と喪失の悲しみに打ちのめされた様子だった。

昭和38年といえば、まだ銀行員でも月給が1万円あるかどうかの時代だ。電化製品などは普及もしておらず、ダイヤル式の黒電話や一槽式の洗濯機に洗濯物を絞るためのローラーがついたのが画期的だった。むろん、各家庭に一台テレビがあるなどは想像もつかない。翌年のオリンピックの中継は、日本国民のほとんどがラジオで聞いただろう。あるいは、人々は街頭テレビに釘付けになっていた。当然その当時の科学捜査は名ばかりのものが多かった。ようやく指紋照合が確立され始めたぐらいで、大抵の捜査は、捜査官の勘と

足と自白に支えられていた。

そしてその男が恋人を殺したと言って自首してきた一月には、各地が記録的豪雪に見舞われて、その日も朝から雪が降り続けていた。「……45年も前の事件か。そこに俺たちがどう関係するんだ」  
八代は、神谷を見上げる。八代には、ただの痴情のもつれによる殺人事件としか感じられなかった。

「そうなんです、男の自供した住所に急行した捜査員たちが見たのは、大量の血痕だけが残ったアパートの一室だったそうです」  
「つまり、死体が消えた？」

そうなんです、と何故か神谷は嬉しそうな表情だ。

「俺なんて、そこまで報告書を読んだだけで人食い（グール）のしわざかと思っただんですけど、どうもそこで終わりじゃないんですよ」

いい歳をした、しかも警察官などという職業に就いている人間が、真面目な顔で「人食い」と言うあたりがもう、普通ではない。しかし、八代たちが相手にしているのは、そういう世界だ。

「結局、その事件は被害者不在のまままで起訴されて、犯人は懲役5年ぐらいで出てしまっています。でも……」

興味が出てきて、八代はパソコン画面を閉じていた。

「その被害者の指紋が、18年後に別の事件で出たんですよ」

ふふ、と神谷が笑うのを、八代は渋い表情で眺めた。

昭和56年のその事件は、当時としてはありがちな犯罪だった。保険金殺人　被害者は50代の男性で、足繁く通っていたスナックのママとその内縁の夫というのに金目当てで殺されている。問題の指紋は、被害者の部屋から出ていた。出たのは雨戸の裏側からで、それは部屋の以前の住人のものと一致している。指紋照合の対象になったのは、大家が保管していた賃貸契約書だった。

名前は、大谷一郎　当時はいまほど身元保証がうるさくなかったのだ。それが偽名であっても、支払いさえ滞らなければ部屋は簡単に借りられた。事実、大谷一郎の戸籍はどこにも存在していない。

「もちろん、昭和38年の科学捜査を信用するとしてですけどね、八代警部。おなじ指紋はおなじ人間のものでしょう。だから、どういわけだかその被害者は生きていたことになるんじゃないですか？」

そう言われて、八代はいつそう渋面になっていた。もしそれが本当ならば、最初の事件の犯人は「殺人未遂」だったことになるからだ。そして、やはり自分たちが動くような事件ではないらしい、と思っていた。そうになると、八代は興味を失う。閉じたパソコンを再び立ち上げようとするのへ、慌てた様子で部下が口を開いた。

「待って、警部。この先がまだあるんですから」

バカ者、小出しにするな、と八代は口調を強くしていた。しかし、そんなぐらいは慣れっこらしい。神谷は、相変わらず微笑んでいる。「で、ここからが本題ですよ……その38年当時に事件を担当した所轄のデカ長さんが、今はもう70も越えてらっしゃるんですけど、その被害者を半年ほど前に見た、って言ってね。それが、うちに案件が上がってきた発端なんです」

「見間違いではなく、か」

「どうもね。だって、そのデカ長事件当時とそっくりそのままの被害者を見つけて、しかもご丁寧に指紋のついた証拠物件まで預けてきた。いやぁ……どういう執念なのでしょう。そう思いませんか？」

だって、犯人じゃないんですよ。相手は被害者。だけど俺も、ファイルの中の写真を見たら気持ち、ちよつとわかりました」

そうしてやっと、八代はその「死体が消えた」事件の報告書を受け取っていた。

八代たちの目の前にいる大塚繁雄は、すでに頭の禿げ上がった老人だった。勇退前の事件で負傷したのが元で、現在も杖をついている。その杖の握りを撫でさすりながら、話していた。

八代たちが通された応接間は、静かだ。

大塚の自宅はちいさな2階建てで、時代遅れのシャンデリアが天井から吊り下がっている。子供はみな独立をして、老夫婦ふたりの生活だ。レースの掛けられたテーブルの上では、飲まれないままのお茶が冷めていく。

「まさか……本当に一致するとは、自分は思ってもおりませんでした」

と大塚はなにかば呆然と呟く。昔の癖が出るのか、それとも八代が上官にあたる役職のためか、敬語を使っていた。

「恋人を殺してしまった、とその男が自首してきた当時、自分などは駆け出しの刑事で若かったですからね。力がはいつたのを覚えておりますよ」

若者の恋人は、男だった。供述通りの住所に大塚以下捜査員たちが急行して、しかしそこで見つけたのは毛羽立った畳の上に広がる大量の血の跡だけ。死体はどこにもなかった。

「当時はね、警部殿……まだ、赤線と言われた地帯がありましたねえ。今も風俗街ではあるんですが、あの頃オリピックが翌年だといつのでどんだん区画整理がされている途中でありましたよ。被害者の青年は、どうもその赤線で働いていたようですね」

あまり数は多くはなかったが、確かに春をひさぐ少年たちがいる店もあった、と大塚は言う。そのことだけでも、大塚には他人事と思えない事情があった。自分の幼馴染がその赤線で働くまでに墜ちたからだ。まだ戦後をひきずって、そうでもしなければ生きていけなかった人間は、大勢いた。その幼馴染は結局、ろくでもない男のせいでヒロポン中毒になって場末で冷たくなっている。まだ19歳という若さで死んだその少女のことを、大塚は男が自首してきてからずっと思い出していた。

被害者はどこへ消えたのか　幼馴染のこともあり、大塚はどこかの病院に保護されていて欲しいと歩き回ったという。

「写真がねえ……アパートの部屋に飾ってありました」

そう言つて、大塚は足元に置いてあったダンボールの中から、フ

アイルを取り出してくる。それは色あせて、およそ10センチほどの厚みがあるのをゴムバンドで止めていた。

「これは、コピーです。その写真を持って、自分は地取りに靴底をすり減らしましたよ」

そこから抜き出された写真だけは、焼き増ししたらしい。キャビネ版で、カラー修正されていた。同じ写真は、すでに八代も見ている。

「まるで女の子のようでしょう。自分はそれを見て……好きでそんな場所で働いていたとは思えずに、それも忘れなかつた理由でしょうねえ。いったい、どんな運命がその青年を襲ったのかとずいぶん考えました。なんだか、哀れで」

生きているのか、それともやはり死んでいて　ただ自首してきた男が隠し場所を言わないだけなのか。

結局のところ、どれほど犯人を締め上げたところでその青年は見つからないままだった。

そして　それで終わっていれば、大塚もしつこく警視庁にまで手紙を出したり、以前いた職場に掛け合ったりはしなかつたのだ。

その写真の下に、もう一枚。これは色鮮やかで、しかも最近のものだった。

「最初にその青年を見たときには、心臓が止まるかと思いました。これほど瓜二つとは、いくら系類でも考えられませんか」

その二枚の写真で違うのは、青年の髪の長さぐらいだった。古いほうは短髪だが、最近のものは背中まで伸ばしてある。

「これは、場所はどこです」  
八代は訊く。大塚は、駅名を答えた。

「月に何度か、自分は通院のためにそこで乗り換えるんですが、帰りに必ず一服する喫茶店があつて、そのななめ向かいの花屋で見かけたんです」

大塚がしつこく指紋照合を頼み始めてから、すでに4カ月近くなっている。その間もずっと、その青年はその花屋で働いていた。

千秋の毎日は、ごく穏やかに過ぎている。

小さな出来事はあるが、恋人の倉田光太郎との生活を脅かすようなものはない。居心地がいいからといって、おなじ土地に暮らし続けることは出来ない。そういう宿命を背負っているが、もう何十年も追われて逃げるような悲しさとは縁がなかった。

たとえそうでも、それも千秋には、辛いことではなくなっている。どこへ行くのも、恋人が一緒だからだ。ある時、ふっとお互い顔を見合せて、そして「行こうか」と身軽く土地を移る。ここ十年ほどは、もう名前を変えたりもしなくなっていた。

悪いことは起こらない。恋人がそばにいる限りは大丈夫だ、と千秋は思うようになっていた。

秋桜をダンボールから出してバケツに移しながら、千秋は今朝も送ってきてくれた倉田を思う。最近恋人は、仕事を変えた。臨時雇いで塾の講師をしていたが、夏休みのシーズンが終ってお役御免となったのだ。いまは、古書店のアルバイトをしている。古書店といつても硬い本屋で、美術書や歴史書が多い。そして、千秋のいる花屋からは筋違いのアーケードの奥に店はあった。

帰りも、倉田は必ず迎えにきてくれた。

そのことを、この店の店長がどう思っているかはわからないが、少なくとも、嫌な感情は伝わってこない。それでも一度、訊かれたことはある。

あの、萩原くん。いつも一緒のあの男性は、その……。

僕の、大切な人です。

ああ、ああ……ええと、そうなのかあ。

ちよつと困惑した表情で言った店長は、それきり何も言わない。ただ、倉田と顔を合わせれば、最近は何となく交わすようになっていた。

秋桜の入ったバケツを、千秋は抱え上げた。それを表に出してい

ると、視線の先に影が差す。ふと顔を上げて やさしい微笑にな  
っていた。

「……奥さん」

千秋がそう呼んだ女性は、大きなお腹を抱えてふうふう言ってい  
た。明るいチエツクのマタニティ・ドレスにカーディガン。髪を少  
女のようにおさげにして、ふんわり幸せそうな笑顔に顔が輝いてい  
る。

「出歩いて、大丈夫ですか？」

千秋は手を貸して、店の奥にある小さな休憩室まで連れて行った。  
ちよつと椅子に腰かけるのさえ、大変そうだった。

「少しは歩きなさい、って言われちゃって……だから、検診のつい  
でに寄ってみたの」

そして、小さなケーキの箱を渡してくれる。

「お三時にね」

「ありがとうございます」

その箱を冷蔵庫にしまっているところに、店長が配達から戻って  
きた。妻の顔を見つけるなり、声をあげて戸口から飛んでくる。心  
配のあまりか小言を言っているのを、その妻が適当にいなして返事  
をしている。仲のいい情景に、千秋はまた微笑みを誘われていた。

(僕は、やっぱり……)

倉田光太郎という男がいないと駄目なのだ、とあらためて思わせ  
られる光景だった。恋人がいなかった間の千秋を取り巻いていた世  
界は、暗く湿ったものだった。自分の何がそんな人々を引き寄せる  
のかがわからないほど、つねに暖かいものは遠かったように思う。

しかし、今はそうではない。

善良な人々。

やさしい気持ち。

幸せのオーラと呼ぶべきものがまた、千秋のまわりに戻ってきて  
久しい。そういう人々を見ていると、千秋も幸せを感じる。

「店長……僕は、店回りを掃除してきますから。ゆっくり休憩して

いて下さい」

千秋はそう声をかけて箸を手に、ふたたび表に出ていた。

表に水を撒いて、箸を使っている青年をガラス越しに眺めているのは、八代と神谷のふたりだった。目の前には互いのカップがある。休日ではないから、それほど混んでいない店内では、二人は異様に目立つ。

八代は濃い色のサングラスをかけていた。

「八代さん……俺たちまるで、ヤクザとその情夫って感じじゃないですか」

コペンハーゲンのティーカップを指先で捧げ持つようにして口をつけながら、神谷がくすくす笑う。部下の本日のいでたちは、藤色のワイシャツに同色の濃いネクタイ、グレーのスーツだ。数年前までは、その白い耳朶にピアスが飾られていたのは八代しか知らない。「情事のあと、ってほど着崩れちゃいないだろうが」

無然としたようすで腕を組み、視線は花屋に向けたままで答えた。

「はい。それは、もちろん」

そう答えて、またくすくす笑う。

八代のサングラスがまずいのだが、しかし彼はそれを外すわけにはいかない。外せば、店内は本物のパニックになる。八代の両目は、うつすらと青い燐光を放っているからだ。

八代は、陰陽師の末裔である。そのせいで、生まれながらに魔を祓う「浄眼」を持っていた。普段は意識してコントロールするが、捜査となるとそんな努力はしもしない。だから、黒いサングラスは常に上着の内ポケットに入っていた。

「飲まないんですか？ 冷めてしまいますよ」

神谷の声に、八代はやっとサングラスを外して瞳の色を元に戻していた。その表情は、どこか思い悩んでいる。

「……どうしたんです」

部下の問いに、八代は答えないままでコーヒーに口をつけた。

その青年が「ひと」ではない、というのはわかっていた。もしそうなら、八代の瞳は反応しないからだ。が、悪いものなのか　と言えばその答えはまだわからない。そもそも、彼は犯罪を犯したわけではないのだ。むしろ、哀れなほど徹底した被害者だった。

この捜査の発端になった事件では、青年は犯人の男に会う以前から身を売っていた。その事情はわからないが　恋人を持ってもその境遇は変わらずにさらに酷くなった。恋人の嫉妬にさらされて、今でならドメスティック・バイオレンスとでもシヤれて呼ぶのだろうが、そういう毎日の果てに刺されて殺されている。いったい、幸せなどというものがあつたのか、と八代は思う。

（本当の歳は、いくつだ）

そして、いったい何度そんな目に遭ってきたのだらうと、つい、考えていた。

「まさか……八代さん」

また、神谷が向かいの席から声をかける。

「嫌ですよ、彼に目がくらんだなんて言うのは」

「……馬鹿か」

苦笑していた。

この部下には、言われたくはない。自分のほうこそ、舌舐めずりをしている獣のような顔なのである。神谷にとつては、とびきりの美食に見えているらしいのが手にとるようにわかつていた。

「まあ、たしかに古風な美しさがあることは認めますよ、俺も」

「そうじゃない。俺は……」

八代は、カチャンと音をさせてカップを置く。

「警察というのは、対症療法専門の医者だと思っただけだ。犯罪が起こって初めて動く。何もしていないモノなら、敢えて手を出さなくても、と考えるのが普通だ」

それは、と神谷がすこし納得できないように反論してきた。

「わからないじゃないですか。過去にどんな事をしてきたかなんて、

俺たちには調べようがない。たまたま、その事件では被害者だったかもしれないけど……不死者の中には、自分の秘密を守るために殺す者もいます」

それも、事実だった。

だから八代は悩むのだ。

「しばらく、様子を見よう」

手ぬるい　と、神谷が舌打ちとともに尖った呟きを洩らしていた。

貰っている時給から考えると、千秋はよく働くアルバイトである。その拘束時間ときたら、近頃は恋人よりも長い。朝は、店を開ける1時間も前から出勤をして、夜は店の後片付けや翌日の用意などで2時間ぐらいは居残っている。そのどちらの時も、鍵を開け閉めするのは千秋だった。

もう、あと一月足らずで予定日なのだ。

いつ陣痛がきて生まれるかわからない、と店長は気が気でないらしい。おまけに、夜中なかなか眠れない、という妻につき合っている。一緒に部屋を歩き回ったり、パンパンに張った脚をさすってやつたりしている。そして、毎日暗いうちから軽トツラクで花の卸売市場に仕入れに走る。

仕入れた花は、店の中に箱ごと置かれて千秋が来てから用意された。店長は、そのあいだまた家に戻って仮眠をとる。出勤してくるときには、千秋が配達の準備を終えていた。

夜も、そうだった。

千秋は店の表に「CLOSE」の札を下げたあと、翌日配達される予定の花籠を作ったりする。そのあとで店を掃除し、売上の明細や連絡のメモを奥の部屋にまとめておく。

本当に、申し訳ない。

そう言ってくれる店長に、千秋はただ微笑むだけだった。

楽しみにしているのだ。

千秋は、生まれてくる子供を楽しみにしている。生まれて落ち着いたら店に連れてきてくれる、という店長の約束を本当に楽しみにしていた。真つ赤に顔を怒らせて泣いている赤ん坊の様子を想像するだけで、千秋は幸せを感じる。あまりにも長い間、たった一人で消えていく命や削られていく魂ばかりを見てきた身には、まっさらな新しい命の息吹はそれだけで嬉しいものだった。

おなじことは、恋人も感じてくれている。千秋の時間に合わせていつも、倉田は千秋の送り迎えをしてくれていた。

(ずっと、こういう時間が続けばいいのに)

と、閉めてしまった店の中で桔梗や秋桜を使って、プレゼント用の花籠を作りながら思う。顔にかぶさった髪を耳にかけて、またパチンと鉄を鳴らしていた。今夜は、それが最後の花籠だった。仕上がる頃には、倉田が来る時間になっているはずだ。そのあとは、掃除をして一緒に帰る。

が、今夜はいつもと違っていた。

札を下げて照明を落としていても、表のドアには鍵をかけていない。ドアは蛇腹になっていて、開けるとガラガラとレールを走る音がする。その音に千秋は顔を上げると、思わず鉄を作業机に置いていた。

「ごめんなさい、今日はもうお終いなんです」

そう言っただち上がる。それをおし止めるようにして、若い男が入ってきた。

「失礼、萩原千秋さんですね」

ためらいもせずに堂々と入ってくる男を、千秋は訝しげに見つめていた。その顔立ちや雰囲気、服装を見ていると堅気の商売をしているとは思えない。青いワイシャツにシルバーのネクタイ、スーツも白に近いグレーのダブルである。襟足にかかる髪が外側にはねて、そういうものを見るかぎりでは水商売の気配がした。

開店祝いの花でも頼まれていたかと、千秋はふと思っていた。

「ああ……花には用などありませんから」

そう言いながら男が内ポケットから出した黒革のケースに、千秋は視線をやっていた。男の手のなかでパクリと開かれたそこには、警察のバッジと身分証明書。

「……刑事さん」

千秋は本気で驚いていた。

「見えないでしょう」

その笑顔は華やかで、美しい。が、千秋はふと寒気に似たものを感じていた。ほんの少し、怖い、と思う。

「あの……どういったご用件でしょう」

「僕の仕事は特殊だね」

言いながら、店のなかに置かれた花に触れるその刑事は、相変わらずの笑顔だった。千秋はそれを見ながら、立っている。

「通り一遍の捜査じゃ解決できない、変わった事件を扱うんです。

たとえば……昭和38年1月に起こった消えた死体の事件とかね。犯人は自首してきて、じっさい大量の血痕も見つかったのに、肝心の被害者の死体はどこにもなかった、なんて事件をね」

刑事の指先に、ポキンと百合の花が折られていた。その百合を鼻先にもつてきて、香りを吸い込むしぐさに、千秋は貧血でも起こしたように顔色をうしなう。そうして、立っていられずに作業台のそばの椅子に、腰を降ろしていた。それでも、視線だけは外すことができなかった。

（……光太郎さん）

いま、恋人がここに来てくれたら、と千秋は願った。そうすれば、ただ穏やかに生きていきたい、という想いは叶うだろう。そっとしておいて欲しいだけなのに、どうして見過ごしにしておいてくれないのかがわからない。

千秋も倉田も 誰かを傷つけたことなど一度もないのだ。ただ、ほんの少しこの世界に交わっていたいと思うだけでこの世に関わっている。

千秋の漆黒の瞳に、涙の膜が張っていた。

「そんな事件は知りませんから、と言っても無駄なんでしょうね」  
言った拍子に、涙がひとつぶ頬を伝っていた。顔を向けた刑事の表情は、冷たい笑顔から驚きに変わっている。それは刻々と表情を変えて、最後には困惑になっていた。

「刑事さんは、僕をここから追いついていただけですか？」

「いや……俺は」

相手の困惑が、そのまま口調に現れている。

「つまり、僕の仕事は魔性のモノを退治することなんです……まいったなあ。そういう風に見られると、自分が悪逆非道な気がしてくる。それも、あなたの手なんですかねえ。そうやって油断させておいて、狙った獲物を手に入れる？」

刑事の勘違いに、千秋は笑いそうになってしまふ。これまでの出来事をぜんぶ話してやったら、千秋がただの一度も捕食者であったためしのないことがわかるだろう。だいたい、人間を手にいれてどうすればいいかも、千秋にはわからないのだ。

ただし、千秋に関わることで人生を狂わせてしまふのが悪いというなら、そういう責任はあるかもしれない。しかしそれも、倉田がもどってきてからはぶつくりと影をひそめてしまった。

「僕を、退治するんですか？」

「それがその……仕事ですから」

本当に、出来るのだろうか　と千秋は思った。

昔ならば、その言葉に飛びついていただろう。連綿とつづく運命に疲れ果てて、本気で死にたいと思っていたからだ。だが、いまは嫌だ。もし自分がいなくなったら　あの恋人はどうなるのか。昔じぶんが味わった苦悩を、こんどは倉田が味わうかもしれないと思うと、胸が張り裂けそうになる。

それに　ほかにも黙って受容できない理由がある。

店長のところに出来たあの新しい生命を、無事にこの世に出してやらなければならぬ。

「……いまは、無理なんです。もうすこし、待てませんか？」

困ったなあ、とその刑事は頭を掻いていた。ひどく勘が狂っているようで、言葉には力がない。

「なんだか、勝手がちがうなあ……だいたいは、正体がバレると豹変して襲いかかってくるんだけど」

「僕は、いままで誰かを襲ったことなんてありませんよ」

千秋は、相変わらず正面に立って見下ろしている刑事に微笑んだ。それが本当のことだとしても、やはり信じきれないらしい。

ずいぶん黙っていたが、相手はゆっくり頭を左右に振っていた。

「申し訳ないけれど……魔物に、こんなこと言うのは初めてなんだけどねえ。それが僕の仕事なんで」

そして、刑事の右手がのびてきて、千秋のほそい首をつかんだ。

八代は、確信を持って車をとばしていた。目指す場所に向かってハンドルを切る手には、ためらいがない。覆面パトカーのサイレンを鳴らしたいが、それが出来ないのが辛いところだ。所轄の交番にも連絡できない。先に警官を急行させても、そこで目撃されることは信じられないものだからだ。

あくまでも、極秘　それが八代たちの仕事だった。

(あの……はねっかえり！)

神谷がひとりで消えた、とわかったときにはもう席を立っていた。どこへ行ったのかぐらい、八代には予測がついたからだ。様子を見る、と言ってからの一週間、どれほど神谷がイライラしていたか、わからない八代ではない。

だからといって単独で、許可も得ずに行動するなど言語道断だった。

駅前のロータリーに車を乱暴に止めると、鍵もかけずに花屋に向かう。スーツの上着が風になびいて、その形相にそぞろ歩く人々が何事かと八代を振り返る。

半ば開いた蛇腹のシャッターを押しあけて　　八代は思わず叫んでいた。

「神谷……!!」

店の奥にある光景に、ドア枠に両手をかけた姿勢のまま八代は固まっていた。

襲っているのは神谷のほうだ。この部下は、相手の精気を吸い取ることで消滅させてしまうことが出来た。どちらが魔物かわからないようなやり方で、だから常に八代がパートナーとして行動している。そうでもしないと、神谷こそいつ魔性になるかわからない危うさがあるからだ。

だが、神谷はじぶんの限界をまだ知ってはいない。常に怖いものしらずで、傲慢で　　考えなしに突っ走る。限界を超えたときの怖さを知らないのだ。

「手を放せっ!」

八代は叫んでいた。

「で、きない……」

答えた神谷の声は、苦痛に彩られていた。対峙しているふたりは、互いに恐怖をやどした瞳を合わせたままだ。神谷のなめらかな頬には、刻一刻とふくれあがった血管が浮き出してまだらに模様を描いている。眼は血走って、瞼からは赤い涙が流れていた。

そして　　抵抗もせずに首をつかまれたままの相手は、輪郭を崩していた。襟元からのぞく首筋には銀色の鱗がきらめいて、小さな顎までを覆って　　それは醜いというよりも幻想的で美しい。華奢な両手が自分の首を掴む神谷の手を引き離そうともがいていた。

「離して……あなたが、死んでしまうから」

だが、どうにもならないらしい。そうと見て、八代が店内に一步踏み込んだ。その八代を突き飛ばすような勢いで、黒い影が風とともに入ってきた。とっさに八代の手が相手の腕にかかる。同時に足をとばして、背負い投げをかけようとするとそれは、ふっと存在を消した。

気がつけば、その黒い影は店内の半ばまで入り込んでいる。

「……待て！」

もう一度、その男の腕を掴んでいた。

「離しなさい……手遅れになる」

落ち着いた声だった。その声を信用したかと言われれば、八代は自信がない。が、静かな口調に手を離していた。

男は、大股にふたりに近づいて行くと、神谷の腕を掴む。瞬間、青い稲妻が走った気がして、八代はとっさに腕で目を覆っていた。その自分に、どん、と重い物体がぶつかって反射的に受け止めた。一緒になつて店内のコンクリートの床に倒れこむ。身を起こしてみると、腕の中にいたのは神谷だった。激しい呼吸を繰り返しているのに、酸素が肺に流れ込まないらしい。真っ白になった肌は、冷や汗と浮き出た血管におぞましい曼荼羅を描いていた。

「い、息が……」

神谷がすぎるような目で見上げて喘ぐ。が、呼吸よりも、心臓だった。

床に横たえて耳を寄せると、八代の耳朶を叩くように神谷の心臓が不規則にわめいて胸郭を打っていた。このままでは、いずれその負荷に耐えかねて心臓は止まる。

そうと見て、八代は問答無用で神谷のワイシャツを両手で引き裂いた。ボタンが音をたてて弾けとび、なめらかな胸が顕わになる。その胸にも血管が浮き上がっていた。そのあいだも、神谷は苦しそうに喘ぎながら喉元をかきむしっている。喉のあたりは、自分でつけた引っかけ傷にむごい有様になっていた。

その手を片手でまとめて掴むと、八代はときどき痙攣する神谷をそのまま押さえつけた。空いた右手の指を二本立てて、指先を噛む人差し指と中指の先から、鮮血が噴きだした。口のなかでは、ぶつぶつと呪<sup>シユ</sup>を唱えている。

そして 八代は、神谷の心臓を囲むように清明桔梗を血で描いた。咳く呪に合わせて、星型の線はつつすらと輝き始める。神谷の

呼吸も心臓も、ほんの少しおとなしくなっていた。

だが、まだ動かせない。

「や、しろさん……」

「黙ってる。本当を言えば、俺はおまえを怒鳴りつけたい気分なんだ」

齒軋りと一緒に押し出したセリフに、神谷がぐったりと目を閉じた。

店内はようやく、静かになる。その静けさの中に低い話し声が出て、八代はやつと奥のふたりを見る余裕をもっていた。

男が、おぼろに輝く青年をゆっくりと横たえながら話しかけているところだった。

「いいから……気を抜きなさい。なにも起こらない、大丈夫だ」

「でも、あのひと……」

萩原千秋の黒い瞳と、八代の目が合う。

心配しているのか、と驚きながら答えてやった。

「こちらも、いまは大丈夫だ」

ほっとしたような微笑に、八代はまた部下に対して腹立ちを覚えていた。手を出す必要のないものに出して、自分が死にかかっているのだ。そうでなければ、本気で殴りつけたいほど腹が立っていた。

「こう、太郎さん……」

「言う通りにしなさい……そのほうが楽だ」

やさしい微笑を向ける男の言葉に安心したように、彼は目を閉じる。なんとか形を保っていた肉体がほどけて淡くなり、それはやがて銀色の鱗をきらめかせて光る一尾のヘビになっていた。そのヘビは、差し伸べた男の袖口から潜りこみ、つぎには男のシャツの襟元から頭をのぞかせると、くるりと首に巻きついた。

ゆっくりと、八代の視線の先で立ち上がった男の目には、やさしさの欠片もなかった。

「お引取りいただくか。普段は助けてやらない事もないが、私の

千秋をこんな目にあわせたとなると、そんな気にはなれない。それに、掃除の邪魔になる」

くるりと背中を向けた男は、その言葉通りに箒とチリトリを手にしていた。この場にそぐわない男の姿に、しかし八代は強烈な拒絶を感じとる。ため息をついて神谷の腕を首にまわさせると、抱え上げていた。

千秋は、万華鏡のようにきらめく世界にいる。

恋人が千秋のために創ってくれる世界はいつも、まばゆいばかりに明るくて、美しい。そのなかで、千秋は穏やかな喜びと共にたゆたう。そこには、絶対的な安心感しかない。恐怖や怯えの入り込む余地はなく、そして千秋はいつも、自分が恋人の一部なのだと実感した。

恋人の手やくちびるが、薄いヴェールで包むように千秋のほどけてしまった肉体を形作ってくれる感覚は、喜びしかもたらさなかった。最初はかない感触でしかなかった肌のぬくもりが、少しずつ確かなものになっていく。

それは、千秋と恋人のあいだにしか成立しない、愛の交歓だ。肉体の快楽ではなく、魂が直接接触れ合って交合し、歡喜する。

(くせになってしまう……)

心のなかの甘いため息は、呟きになって洩れていた。

気がつくと、千秋はくつきりとした肉体とともに倉田の腕の中に存在していた。見上げる先には、暖かい笑顔がある。

「……光太郎さん」

「やっと、お目覚めだな」

そう言われて首を巡らせると、アパートの部屋から眺める空はもう明るかった。

「……ひと晩中？」

笑顔とともに千秋は訊いてみる。腕枕をしていない方の手がのび

てきて、シーツの上に広がる黒髪をすくいあげていた。つまんだ一房が、千秋の肌をなぞってくすぐる。幸せそうなくすぐす笑いを洩らしていた。

「ああ、一晩中」

その言葉に、千秋は倉田の首に腕をまわして抱きつく。抱き返してくれる腕は、やはり暖かくて力強かった。これはこれで、千秋の喜びだ。何度もキスをし、互いの目をのぞきこんで微笑み合った。

花籠を、と倉田が千秋の身体を全身で確かめながら、耳元で囁く。

「……花籠？」

「おまえが活けかけたままの、あの花籠だが。あれはさすがに、どうにもならなかった」

掃除をしたり鍵をかけたりは倉田にも出来たが、じぶんが活ければせつかくの花がだいなしになる、とそのままにしてきたらしい。それを想像して、千秋も素直にうなずいてしまう。

この恋人が活ければ、おおらかな性格そのままに花は間の抜けた大きなものになってしまうからだ。愛らしさも、情緒もない。

「漢詩の才能は、神童と言われていたのに」

と昔の栄光を持ち出して、千秋はまた笑う。

「そう。日本のあんな山奥にいたわりに、俺の漢詩は大陸のように雄大でな」

倉田も笑っていた。そうしてやっと腕をとり、ふたりはベッドから抜け出した。

千秋はチエツクのシャツを選んだ。袖を通すと両手を上げて首の後ろに差し入れ、長い髪を持ち上げると背中に流す。その髪に倉田が触れて、指で梳いてもてあそぶ。

「光太郎さん……あのひと、大丈夫だったかな」

「気になるのか」

シャツのボタンを留めながら、千秋はそう訊いた恋人を後ろに頭を傾けて見返す。小さくうなずくと、雄弁なため息が返ってきた。

「仕方がない……俺が、様子を見に行つてやるう」

千秋は嬉しさをあらわすために、倉田にとびついた。

八代の怒りは、一夜明けても治まらなかつた。

いまでも、警視庁のじぶんのデスクで全国の事件データ・ファイルを検索にかけながら、視界の端に神谷を捉えている。神谷はまったく生氣のない青白い顔で、パソコンに向かっていた。

その神谷の姿は、その日8名在席していた捜査員たちの密かな噂の的だ。サイズの合っていないワイシャツと昨日とおなじスラックス。ネクタイは地味すぎるし、すっかり疲弊して、おまけに首には白い包帯。チーフの機嫌は台風なみに悪いし、いったいどんな妙な遊びをしたのだろう、と彼らは本気で思っていた。そういう空気も八代には腹立たしい。

しかし、根本的な原因は神谷だつた。神妙な顔つきで仕事をしているが、どこまで反省しているかがわからないのだ。たしかに、シヨックは受けているらしい。神谷にとっては、じぶんの手に余つた魔性はおそらく初めてのことだ。大人しい原因がそれだけだとしたら、あいつはまたやる、と八代は思っていた。

なんのためのパートナーか、神谷はわかっていない。それが、八代は腹立たしかつた。

ゆづべ、死ぬほど怖い思いを八代は味わつた。

最も近いじぶんのマンションへと走らせる車の中で、神谷の心臓は何度も止まりかかつたのだ。右手でハンドルを操り、のばした左手を神谷の心臓におしあてて、そのつど「気」を送り込む。止まりかかつた心臓は、そうしてまた弱々しい鼓動を取り戻した。

吸い取つた精気が多すぎる　それを吐き出させて浄化してしまわなければならぬ。

やっとマンションの地下に車を入れると、八代はもう歩けない部下の身体を担いでエレベーターに乗る。小康状態は長くは続かないから、時間との闘いだつた。神谷の身体は、長時間の酸欠状態に全

身血の気がなくなっていた。

無言で神谷をベッドに下ろすと、斟酌なしに上着もシャツも引き剥がす。ボタンは千切れて弾け飛び、布地は裂けた。ワイシャツなどは、身頃がズタズタになる。

「ら、んぼつ、なんだから……」

それでも、神谷の口は軽かった。

「もっ、と……やさしく、して」

「そういう口がきけるなら、上等だ」

八代の顎には、力が入っている。不安と恐怖、猛烈な怒りのために声が軋んでいた。ぐったりしている神谷の身体を裏返すと、ベッドの縁から乗り出すように頭を移動させる。神谷の両腕は、だらりと床に垂れていた。

八代も上着を脱いで、ワイシャツの袖をまくり上げた。サイドボードの引出しから、ガラスの小瓶にはいった香水コルスイを出すと、神谷の髪をつかんでのけぞらせた。

「いいか……これでおまえが死んだら、俺は一生許さないからな」

神谷の顔に息を吐きかけるように言うと、一瞬驚いたように瞠られた目と合っていた。そうして、神谷は青白い顔にあるかなしかの微笑を浮かべた。

ふと、八代はそこまで思い出して、現実に戻ってきた。そうして、あらためてパソコンに向かっている部下の横顔を見る。

あの、微笑の意味がわからない。

もともと、心の根っこ部分で曲がりくねったややこしい奴なのだ。生い立ちや、あの体質を考えれば無理もない。出会ったときの神谷は、その見かけ通りのホストだったし、しかも店での評判は「スゴ腕」それをスカウトして、引き抜いたのは八代だ。特別この仕事を好きだとも思えないが、それでも3年真面目に職務に就いている。

(そろそろ、ひとり立ちできるとでも思ったのか)

そうなら救いがたい馬鹿だ、と八代はまた息を吹き返した怒りを

感じていた。思い返せば思い返すほど、怒りの度合いが上がってくる。とても仕事に集中できずに、八代はとうとう検索途中で電源を切った。そして、問題の部下の名前を呼ぼうとして、ありえない人物の出現に、中途半端に立ち上がった姿勢で凍りついた。

ゆうべの男が、そこにいる。

広い部屋のすみ　神谷の席のむこう側。

誰も、その気配にさえ気づかない。神谷でさえ、黙ってパソコンでの作業を続けていた。

「お、まえ……」

八代の口から、掠れた声が漏れていた。

男は悠々と部屋を横切って八代の前に立ち、呆然と恐怖に凍りつく捜査員たちの中で口を開いた。

「千秋が、あの刑事さんはどうなっただろう、と心配するので様子を見に来た」

じゃあ行ってくる、と店まで送ってくれた倉田を見送って、千秋は鍵をあけて店に入る。いつもより少し遅れてしまったが、花籠を仕上げてしまう時間もあるし倉田の掃除は行き届いていて、ゆうべの混乱の跡はどこにもない。

そのことにほっとして、千秋は花を店の表に出し始めた。顔にかかる髪をうしろでまとめて、仕事にかかる。店の中央にはもう、店長が仕入れてきた箱入りの花が積まれていた。ひとつひとつ梱包を解いて、バケツに張った水の中に入れてやる。元気のない花は、千秋がしばらく話しかけながら触れていれば、花卉に艶をとりもどした。

この店の花は保ちがいい、という評判がたっているのは千秋のためだった。千秋はじぶんの精気を分け与えることが出来る。それは、相手を選ばない。物でも人でも　植物でも同じだった。

千秋には、倉田がどこへ行ったかわかっている。あの恋人にとっ

て誰かを探すことは、針の山のなかの一本でも容易い。千秋がもう「ひと」ではない、と言うなら倉田はその千秋を永遠の伴侶に選んだ「神」だ。千秋の運命は、生まれたときから決まっていた。そしてそのことを、幸せに思っている。

長かった慟哭と流浪の旅も、ここへ行きつくためだったのだと思えば、少しは痛みも癒された。千秋の「神」は、そういう点いつでも話を聞いてくれる。

花籠を仕上げて、店長が置いていった値段表に合わせてカードに金額を書き入れる作業をしていたら、いつの間にか開店時間になっていた。店を開けてしばらくすると、店長が配達のために出勤してきた。

「しばらく来られないだろうから、今日また寄ると言ってたよ」

妻を、病院に送ってきたらしい。店長は、幸せそうな笑顔でそう千秋に告げた。

「無理をしなくても……もう、あと何週間かでしょうに」

「うん。僕らも初めてのことだからねえ。前もって入院できればそうしたいと話してるんだよ」

配達メモと品物を積み込みながら、店長が答える。

「たのしみですね」

そして、千秋も笑顔で店長の軽トラックを見送った。

その後しばらくまた、千秋はひとりで店番をする。こまめに掃除をしてみたり、店頭に並べる小さなブーケを作ってみたり。それは穏やかな時間を連れてきた。その間には、倉田が顔をのぞかせてくれる。

心配していた刑事は、酷い有様だが元気だ、と伝えられて心底ほっとした。

あるとき彼は　なんども千秋の首からじぶんの手を引き剥がそうと試みてくれたのだ。しかし、どうやっても離れなかった。千秋は、じぶんの精気が相手の中へと急激に流れ込み、死へ導くのを恐怖とともに見つめていた。

(本当に、よかった……)

安堵のため息をついて、千秋は出来上がったブーケをガラスの力  
ツプにそれぞれ挿すと、店の前に並べていた。

「萩原、千秋さん」

昨日につづいて名前を呼ばれて、千秋はちよつと不安を覚える。

振り向いた先には、ゆうべの男が立っていた。ダーク・ブルーのス  
ーツに、黒いサングラス。服装自体は地味だが、迫力のある体格と  
顔立ちがサングラスでよけいに悪者っぽく見えた。

「ゆうべは、私の部下が失礼をした」

剣呑な用件ではないらしい、と千秋は店の奥にその男を通して  
いた。

二人掛けのテーブルについて、八代という刑事はインスタントの  
コーヒーを飲んでいた。相変わらずサングラスは外さないが、その  
理由に千秋は納得する。そして、どうして八代たちが千秋の元に  
来たのか、その理由も聞いていた。

「そんなに、長い間……？」

じぶんを覚えて気にかけていた人間がいたのか、と驚く。一面識  
もなかったはずなのに、とその大塚という元刑事の話は千秋の胸を  
打っていた。

「指紋については、我々の照合ミスで明日にでも説明に伺うつもり  
です。ついでに、萩原さんが関係していそうな事件の資料は、すべ  
て処分することにしましたよ」

八代のセリフに千秋はつい、いいんですか、と訊いていた。

「いいんですよ。どのみち、私たちの捜査はいつも極秘扱いです。  
所轄の事件ファイルに記載されたりしませんし、あなたの場合は、  
どれもおそらく半分未解決のままでしょう。消えたところで、気に  
する者はいませんから。それよりも、警視庁のあの部屋にあらゆる  
セキュリティをものともせずに現れた、倉田光太郎とは何者なん  
で  
す」

「光太郎さんは、なにも言いませんでしたか」

それも、恋人らしい、と千秋は可笑しく思う。じつさい倉田は「神」なのだが、それをわざわざ宣言するのは子供っぽいとも思っているのだろう。

「あの人は 竜神の化身です。本人はちつともそんな偉ぶったところはないけれど」

確かに、と八代が同意していた。

「ずいぶん気さくな竜神でした」

どうやら倉田は、いつものジーンズと足もとは素足に下駄、という格好で訪れたらしい。人間の素朴な願望としては、神ならそれらしく出現して欲しいという気持ちはどこかにある。それを、裏切られた、と八代は笑っていた。

「しかし、それでわかりましたよ。なぜ私のこの目が反応しなかったのか」

千秋は、ずらされたサングラスの向こうで淡い燐光を放つ目を見返した。

「萩原さんも、なかばそうなんでしょう。魔物ならば、私のこの目には怯えます」

そういう話をしていると、店の入り口にひとの気配がしていた。

千秋は、ふつと振り向いて 慌てて席を立っていた。

「奥さん……？」

そこにいて、少し前屈みの姿勢で歩いてくるのは店長の妻だった。大きなおながつかえて完全には前に屈めず、片手を腰にあてていた。

「ああ、萩原くん」

とんで行った千秋に、八代もついて来る。ふたりで手を貸して、ようやく椅子に座らせていた。そのことに、ほっとしたらしい。笑顔が返ってきた。

「さつきね……商店街のむこうで自転車にぶつかられちゃって」

子供の自転車は怖いわねえ、と相変わらず気になるのか腰をさすってばかりいる。

「打ち身にもなったかなあ……すごく、腰が痛くって」  
そう話す口調が、少しずつ強張っていた。

「萩原くん……」

千秋の手は、ふつくら柔らかい手に掴まれていた。

「我慢、できないぐらい、痛い……」

その青くなっている顔を見ながら、千秋は握られる手の痛みに耐えた。とん、と八代が千秋の腕を突いて、無言でコンクリートの床を示していた。乾きかけた床に、新しい水たまりが出来ている。

まだ、予定日まで一か月近くもあるのだ。しかし、ぶつかられた衝撃のせいで店長の妻の身体は、子供を産もうとして破水していた。

「八代さん、救急車を」

それを聞いて、にわかにな不安になったらしい。怯えた瞳が千秋を捉えていた。

「ど、どうして……？」

問いかける声が、震えていた。

「店長も奥さんも、おっとりされているのに。赤ん坊はそうじゃないみたいです。早く生まれてきたい、って」

千秋はやさしく微笑んでいた。

「……そんな」

どうしよう、とパニックの兆しが顔に現れた。千秋は掴まれている手を握り返すと、彼女の身体に腕をまわす。それでも、悪いことに彼女は痛みがくるたびに、全身に力を入れていた。呼吸は浅く、激しい。瞳の中には恐怖があつて、本能的に痛みへの反射を繰り返すことを止められない。それは、千秋がいくら言っても無理だった。このままでは、未熟児で生まれてしまう。だから、自分はこの導かれてきたのだ。それは最初から、わかっていたことだった。

（せっかちな坊やなんだから……）

そして、千秋は消防に連絡をしている八代をちらりと見て、おもむろに握られていない方の手を彼女の腰にあてていた。腰骨の真ん中あたりに手を置いて、ゆっくりと温めてやる。

「奥さん、落ち着きましよう……大丈夫だから」

腰の痛みも、陣痛の収縮も、それで少しは落ち着くはずだ。

「どうしよう、萩原くん。おなかが冷たい、どうしよう」

「大丈夫……」

気がつくと、八代がそばに立っていた。ちらりと見上げると、驚きの表情になっている。それで千秋は、やはり八代には視えるのだ、と思っていた。

千秋の物理的な手は妊婦の腰に置かれたままだが、そこを通し、もうひとつの手が子宮の中にはいつている。その手は、むずがる赤ん坊をあやしていた。

（もうちょっとだけ、そこにいなさい。いい子だね）

千秋はやさしく、話しかける。

赤ん坊は、まだしばらくむずがっていたが、やがてまた眠りに落ちていた。それと同時に、小さな声が彼女から漏れていた。

「……あ」

痛いほど握られていた千秋の手にかかる力が、少し緩む。

「暖かくなってきた……痛くない」

不思議そうに見上げてくるのを、千秋はまた微笑みで応える。そこへ、救急車が到着し、店長までが配達から戻っていた。

「ど、ど、どうした!」

救急隊員ふたりに寄り添われている妻の姿に、正直に狼狽していた。

「早産かもしれないんです。ここは僕が見ていますから、一緒に行つて」

そうか、そうだな　と言っている店長のやることときたら、今頃になって保険証が、とレジ台の引き出しを引っ掻きまわす有様だった。

「店長、いいですから!」

その背中を乱暴に押して、千秋は救急車に乗せていた。

見送っていると、隣に八代が立っていた。

「うちの神谷に……」

「ええ」

「もう少し待て、と言った理由はこれですか」

訊いてくるのに、千秋は笑顔になる。

「ときどき、呼ぶ声がするんです。本当なら、光太郎さんと一緒にあれば、この世界にいらなくてもいいのだけれど。そういう声がするから、僕たちはここにいます」

なるほど、と八代が呟く。

「本当に、神谷は馬鹿です」

付け加えてもう一度頭を下げると、八代もまた店の前に出来た人だかりの中に消えていった。

「ほらあ！ 可愛いでしょう！」

浅い春の訪れたその花屋の店先には、温室育ちのチューリップが並んでいる。そこにいるのは、トウモロコシのひげみたいな毛をふわふわさせた赤ん坊とその母親。自慢げな顔の店長は相変わらず、配達の準備に忙しい。

そして、その赤ん坊の小さな手が握っているのは、華奢な指だ。

赤ん坊に預けていない方の指で、ぷ、と千秋はリンゴのように赤いほっぺを突く。きゃっきゃっ、と笑って腕を振り元氣いっぱいの子供に、千秋はやはり幸せそうに微笑んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9923i/>

---

まほろば

2010年10月8日15時25分発行